

(ポスター発表) 於：いのりフェスティバル2014 関西、日本基督教団東梅田教会、2014 年3 月8 日(土) 13:00-18:00

団体生活における理想・当為主義とセクシュアリティ／ジェンダーの葛藤をめぐる考察——キリスト教系の学生寮における事例研究——

「共同研究」：倉井 香矛哉 (イクトゥス・プロジェクト共同代表、音楽家、文学研究者) / 浦田 剛 (早稲田大学国文学会、機光利一文学会運営委員、日本文学協会)

【問題】

無教会キリスト教の精神に基づく学生寮に入寮した学生が、「学寮設立趣意書」に掲げられている理想・当為に深く共鳴していたにもかかわらず、一種の環境不適應に陥ってしまった事例。⇒「団体生活」においてしばしば起こりうる課題。

【目的】

本発表の目的は、ある団体・集団が掲げる目的とその前提となる価値規範(理想・当為)とセクシュアリティ／ジェンダーとのあいだの葛藤を、規範を形成するテキストの読みと自己-他者の関係性のレベルで問いなおすことにより、同様の事例における問題の解明を促すための手がかりとするところにある。

【方法】

〔事例研究〕本発表では、当事者による語りをもとに、寮運営の方針にかかわる創設者・黒崎幸吉の「学寮設立趣意書」や、当時の寮長の方針を表した文章を分析した上で、その根柢にある旧約聖書「創世記」のテキストとのあいだでの比較分析を行う。また、キリスト教における男女観と結婚観の結託している状況に対して、今日盛んに研究されているセクシュアリティ・ジェンダー論の視点からの批判を導入するとともに、内村鑑三が問題提起していた聖書テキストの〈読み〉をめぐる問題を提示した上で、読み手としての当事者の主体性の獲得、規範を絶対化しないための志向相関性、「生き方」の相互承認、という視点を導入することによって、個別的問題をそのつど解明へと至らしめるための考え方の一端を提示したい。

なお、本発表はあくまで事例研究であり、寮生活における葛藤の具体例を広く集約するような数量的なアプローチ(統計、アンケート等)は行わず、継続調査の課題としておきたい。

【論証】

〔創設者・黒崎幸吉の構想〕「有望で真面目な学生を、現在の教育制度に委せてしまわずに、その才能を正しく用いさせる精神的指針を与え、真の意味に於て日本の為、人類の為に生死する人間を育て上げる事」⇒学寮創設の「最善」の目的 ⁽¹⁾

〔被験者〕「学寮設立趣意書」に掲げられている「信仰的清純の環境」と「正義と愛の理想に導く団体生活」によって「健全なる判断力」と「確固たる責任感」を育む教育指導方針に共感し、2010 年度に入寮。⇒しかしながら、団体生活に順応できず、現在は一人で生活。

〔環境不適應の原因〕 [1] 本人の気質 [2] 大学院での研究生生活の停滞 [3] 被験者自らの性自認／性指向について ※当事者の語りに基づく ⁽²⁾。⇒セクシュアリティ／ジェンダーの視点だけでなく、個人の気質、個別的な状況によって、さまざまなライフスタイルへの適／不適がありうることを強調しておく。

〔状況〕男子寮⇒2010 年度より女子寮が開設される

「学寮の教育方針が聖書に基づくものである以上、寮の共学化は避けられないものであると思われる」(小舘美彦「女子寮開寮にあたって」 ⁽³⁾)

⇒当時の寮長の方針では、旧約聖書「創世記」の記述を引用するかたちで、「男女は何事によらず助けあって生きていくべきである」(＝当為:「～べき」)という「神の意志」に沿った学寮運営の必要性が導きだされている。

⇒このような男女観は、2011年に開催されたOB交流会において「寮生たちの就職と結婚の面倒をみたい」という意向がOBによって語られたことから補強される(OB全員がクリスチャンではないため、「現代」「日本人」に内面化された見方、という可能性もある)。⇒要検討!

《キリスト教、聖書の記述における男女観》「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう」(旧約聖書「創世記」2章18節)

⇒「助ける者、助け手(a help meet)」とは?

《内村鑑三の結婚観》「夫妻の関係は人類の関係中最も親密なるものにして親子の関係も之に及ばずとなり」(内村鑑三「女性の創造」 ⁽⁴⁾) ⇒異性愛主義の内部における男女対等の可能性(当時としては、「支那的道德」=父母への忠孝に対抗する新しい言説であった)。

「そもそも「結婚」は異性愛者のためのシステムです。「男女関係」「夫婦関係」ということばで表されているとおり、一夫一婦制度に基づいて、その愛のありようを制度化したものであり、特権化されています」(本多香織, 2004) ⁽⁵⁾

《新しい読み》当初は獣や鳥を「助け手」にしようとした。⇒助け合うためのパートナーを造ることが神の計画の主旨であり、かならずしもその相手は「女」である必要はなかったのではないか。

⇒動物、あるいはLGBT／性的少数者、身体的欠損によって生殖能力を持たない方々であっても、人格的な「助け手」となりうるのではないか。⇒〔課題〕他の聖書箇所をふまえて妥当かどうか。

⇒重要なことは、これはテキストの〈読み〉の問題だという点である。「文字に由りては聖書の文字たりと雖も人を殺すのである」(内村鑑三「ルーテルの残せし害毒」 ⁽⁶⁾) ⇒聖書の言葉の解釈は読み手にとって固有のものであり、また一方で、時代・社会的状況に応じて政治性を帯びてしまう側面もある。しかし同時に、そこには読み手自身の主体性の獲得という一面もある。

【まとめ】

団体生活において「理想・当為主義」に基づく規範を絶対化しないための視点。⇒〔志向相関性〕方法の有効性は、目的、状況、当事者の身体性、欲望、関心に応じて決まる ⁽⁷⁾。今回の発表内容は、創設者・黒崎幸吉の掲げた「最善」の目的に共感して入寮したはずの寮生が環境不適應に陥ってしまった事例である。つまり、「目的」とその前提となる価値規範を共有していながらも、個別の「状況」、あるいは本人の「身体性」によって、団体生活の適／不適、個人レベルの生活スタイルに起因する葛藤が生起する可能性がある。⇒「生き方」の相互承認 ⁽⁸⁾

⇒当時の寮長の方針として、かならずしも「学寮設立趣意書」に掲げられた規範や寮則を絶対化せずに、柔軟な運営がなされていた。ただし、実際の生活環境は男子寮と女子寮に分かれてしまっており、また、運営方針の根幹をなす聖書の言葉には男女の別を前提とする発想があったことは事実である。そのため、トランスジェンダー当事者や性別違和を感じている学生が入寮した場合には個別的問題にそのつど対処していく必要があると考えられる。

【註および文献】

- (1) 黒崎幸吉「学寮設立趣意書」(1958)本文は公益財団法人登戸学寮のHPにて閲覧可能(<http://www.gakuryo.or.jp/gakuryotoha/seturitusuyuisyo.html>)。
- (2) 倉井香矛哉「MtF レズビアン(自認)ですけど男子寮に三年間住んでみた」『あじーる』第二号(あじーる編集委員会、2013)
- (3) 小舘美彦「女子寮開寮にあたって」『方舟』50号(財団法人登戸学寮、2009)
- (4) 内村鑑三「女性の創造」『聖書之研究』第15号(聖書研究社、1900)
- (5) 本多香織「結婚も、結婚式も、ほんとうに必要なのか?」『福音と世界』第59巻第1号(新教出版社、2004)
- (6) 内村鑑三「ルーテルの遺せし害毒」『ルーテル伝講演集』(岩波書店、1921)
- (7) 西條剛央『構造構成主義とは何か』(北大路書房、2005)
- (8) 浦田剛「「生き方」の相互承認をめざして——構造構成主義(構造構成学)における目的-情動性の相互連関規定性をめぐる考察——」『思想がひらく未来へのロードマップ 構造構成主義研究6』(北大路書房、2014) ※今月20日に刊行予定。

※本発表を準備するにあたっては、京都大学キリスト教学研究室の渡部和隆氏からTwitter 経由での応答というかたちで重要な示唆をいただいた。末尾にて深く感謝申し上げたい。なお、聖書箇所引用にあたっては新共同訳を用いた。